家庭注射療法のその後の成績

聖マリアンナ医大小児科　山　田　兼　雄
協同研究者
慶応大小児科　福　本　哲　夫

血友病患者に対する抗血友病製剤の家庭注射療法（home infusion）は海外においてはかなり普及し、その効果が認められている。われわれは昭和５０年９月より合計２１名の患者にhome infusionを試み、かなりの成果を認めその成績を昨年度の本研究班において発表した。今回home infusion開始後２年間以上観察出来た１０例の実施状況をまとめそれを報告する。

実施に当って症例の選択を厳重に行ない、すでに昨年度示した表１の条件に適応する症例のみに実施した。

結果：２年間以上観察出来た１０例の実施状況を表２に示した。　a）１年間の出血頻度は最初の１年間と２年目ではあまり変化がなかった。　b）それにもかかわらず実施頻度の増加した例が№1. 3. 5. 7. １０の５例に認められた。　c）昨年の成績では１年目で実施前より学校の欠席日数が減少した例がかなり認められた。本年度の観察では１年目より２年目でさらに欠席日数が減少した例が多く認められた。

考案：アンケートの成績を中心にhome infusionの利点を表３に示した。まず、患者家族全員が出血に対する不安感から開放され明朗になったという印象を強く持っており、その他疼痛の回復が早い。さらに明らかなものとして欠席日数が通学児童１５例中１４例までが著明に減少している。以上の如くhome infusionは有意義な点が多々ある事は認めるが、一方今回表２に示した様に全体として２年目の方が注射回数が増加する傾向が見られた。この事は外国の報告でも認められ、さらに長期間観察すると３年目頃より減少する傾向があるともいわれている。患者№4は血友病性関節症の患児で、１度出血すると回復が遅く、あまりにも注射回数が多いため週３回の定期的補充療法にしたところ前年度にくらべて１年間で６３回も注射回数が減少し、さらに欠席日数も47日減少した。今後さらに検討を続け、患者に適切な止血対策の教育を行ないつつ、一層慎重に実施して行きたいと考えている。

表１　家庭注射療法実施の条件

1）　病院から遠隔の土地に住んでいる。
2）　出血が頻発する。
3）　１年以上当科で診療している。
4）　手技者が信頼出来る。
5）　ショックの既往がない。
6）　家庭注射療法を熱望する。

表２　　家庭注射療法１０例の詳細（２年間以上観察した症例）

No.		No.1. K・I		No.2. Y・H		No.3. S・Y		No.4. T・O		No.5. N・Y	
年令		8		8		38		7		8	
開始年月		51年4月		51年7月		51年9月		51年9月		51年10月	
		1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目
実施頻度	総回数	135	190	44	14	18	38	236	173	28	50
	回数/月	11.3	15.8	3.7	1.2	1.5	3.2	19.7	11.4	7.3	4.2
	総本数	238	239	88	26	30	72	352	295	36	78
出血総回数		81	63	40	30	15	14	20	27	26	24
回数/月		6.8	5.3	3.3	2.5	1.3	1.2	1.7	2.3	2.2	2.0
目的	早期止血	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	定期的		+						+		
	予防的	+	+	−		+	+	+	+	+	+
休学日数/年		23	38	32	18	/	/	67	20	0	2

No.		No.6. N・T		No.7. D・F		No.8. K・Y		No.9. N・T		No.10. T・B	
年令		20		8		6		7		3	
開始年月		51年11月		51年12月		52年1月		52年2月		52年2月	
		1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目	1年目	2年目
実施頻度	総回数	63	47	39	77	177	178	32	23	37	91
	回数/月	5.3	3.9	3.3	6.4	14.8	14.8	2.7	1.9	3.1	7.6
	総本数	127	95	76	130	354	356	64	46	74	182
出血総回数		41	34	37	62	27	14	24	20	26	48
回数/月		3.4	2.8	3.1	5.2	2.5	1.2	2.0	1.7	2.2	4.0
目的	早期止血	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	定期的					+	+				
	予防的	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
休学日数/年		/	/	3	3	?	?	7	1	/	/

表3　家庭注射の利点（アンケートによる）

情緒的改善	21／21
疼痛の回復が早い	14／21
欠席日数の減少	14／15（変化なし　1例）
運動障害の改善	14／21
不　安　有	4／21

血友病A血尿患者に対する高単位濃縮第Ⅷ因子製剤投与効果について

奈良県立医科大学小児科
福井　弘
高瀬　俊夫
市川　正裕
藤村　吉博
吉岡　章
岩垣　克己

目的：我々は血友病A患者の血尿に対し、従来cryoprecipitate剤で止血をはかってきたが、しばしば出血が遷延し、又反復輸注により高Fibrinogen血漿を伴い無尿に陥った死亡例も経験した。今回、重症血友病A患者6例に濃縮第Ⅷ因子製剤41～60U／kg 1回輸注しⅧ：Cを100％前後に上昇させた際の臨床及び止血効果を観察した。

方法：第Ⅷ因子活性（Ⅷ：C）：Hardisty 1段法、第Ⅷ因子関連抗原（ⅧR：AG）：Laurell法、von Willebrand因子活性（ⅧR：WF）：Alain-Brinkhousの変法、Fibrinogen量：TGメーター法

成績：(i)、4例に高力価濃縮第Ⅷ因子剤（41～53U／kg）を1回注入した。全例に注入後4～24時間以内に肉眼的血尿は消失した。Ⅷ：Cは注入30分後80～130％と最高値に達し、24時間9～20％、48時間1～12％と漸次下降した。Fibrinogen値は30分後最高値278～480mg／dℓとなったが、投与前に比して63～180mg／dℓと軽度の上昇であった。

しかし1回投与を行った4例中2例に72時間後再出血ありcryoprecipitate剤を投与した。

(ii)、2例に初回高単位投与した48時間後に再度高単位投与を試みた。初回投与後数時間で血尿は消失し、以後数週間再出血はなかった。この際再投与によるFibrinogen値は430～480mg／dℓと軽度であった。

結論：高単位1回投与法は患者への負担が少なく且つ、高血圧、高Fibrinogen血漿の心配もな

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

血友病患者に対する抗血友病製剤の家庭注射療法(home infnsion)は海外においてはかなり普及し、その効果が認められている。われわれは昭和 50 年 9 月より合計 21 名の患者に home infusion を試み、かなりの成果を認めその成績を昨年度の本研究班において発表した。今回 home infusion 開始後 2 年間以上観察出来た 10 例の実施状況をまとめそれを報告する。

実施に当って症例の選択を厳重に行ない、すでに昨年度示した表 1 の条件に適応する症例のみに実施した。